ティーチング・ポートフォリオ（教育業績ファイル）

教員氏名	山内　毅

主な担当科目	舞台音響演習

2025年の教育目標・授業に臨む姿勢	1）新しいカリキュラムを円滑に運用できるようにする。 2）実習のクオリティを維持するため、機器備品の管理を適切に行う。 3）実習の成果を次につなげられるようにする。
2025年の教育に関する自己評価	1）新カリキュラムの運用について、基幹教員で話し合いを重ね、ある程度の成果を出せた。次年度への反省点も出た。 2）経年劣化が著しい機器も多いため実習時に苦労しているが、一部のスピーカを更新するなど計画的に改善を行っている。 3）実習後の反省会を、今まで3年生のみで行ってきたが、今年度から2年生も参加して合同で行っている。次年度に反省が活かされることを期待したい。

2025年のFD活動に関する自己評価	必須のFDには参加したと思う。（一部オンデマンド）分科会FDでは、主査として司会を務めている。
授業改善のために取り入れた研修内容	FDで研修した内容や挙がった課題などは、学生の対応に役立てている。

2025 年度（春学期）「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：2094　教員名：山内　毅

1）アンケート結果に対する所見

（ア）「舞台音響演習」について（L・R 統合）

Q10 は 3.89 であり、全体平均を上回っている。Q5、Q6、Q8 も概ね良好である。自由記述では、機材に触れられ実践的な内容であったことへの肯定的意見が多く見られた。一方で、口頭の説明だけでなく、Teams 等に手順を載せてほしいとの要望もあった。

（イ）「舞台機構調整演習」について

回答率は高く、Q10 は 4.00 で満点である。Q1、Q2、Q5 も 4.00 であり、授業内容への理解、興味・関心、満足度はいずれも高い。Q6、Q8 も 3.86 であり、全体として良好な結果である。自由記述はなかった。

（ウ）「録音制作Ⅰ」について

回答者数は 5 名と少ないが、Q10 は 3.80 で全体平均を上回っている。Q6 も 3.80 であり、授業内容は一定程度理解されていると考えられる。一方、Q8 は 3.40 であり、他項目に比べるとやや低い。自由記述はなかった。

2）要望への対応・改善方策

（ア）「舞台音響演習」（音響）について

実践的な内容への評価が高いため、今後も機材を扱う時間を多く確保する。あわせて、操作手順や作業の流れを Teams 等で共有し、授業中や復習に確認できるようにする。特に、調整卓の基本操作については、学生が途中で迷わないよう改善する。

（イ）「舞台機構調整演習」について

現在の高い満足度を維持しつつ、実技と理論の結びつきをより意識させる。資格取得に向けて知識だけでなく、舞台現場でどのように安全確認や音響操作に活かされるのかを具体的に示し、実践力の向上につなげる。

（ウ）「録音制作Ⅰ」については廃止科目のため記載しない

3）今後の課題

（ア）「舞台音響演習」について

学生の理解度に差が出ないよう、手順の可視化と復習資料の整備を進める必要がある。また、単なる体験で終わらせず、音響システム全体の理解につなげることが課題である。

（イ）「舞台機構調整演習」について

良好な結果に満足せず、基礎事項の定着と現場での応用力の両立を図る必要がある。安全管理、機材理解、共同作業の重要性を引き続き意識させ、実習系科目への接続を強める。

（ウ）「録音制作Ⅰ」については廃止科目のため記載しない

以　上

2025 年度（秋学期）「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：2094　教員名：山内　毅

1）アンケート結果に対する所見

対象科目全体として、Q10「総合的にみて、この授業を受講してよかった」は概ね高い結果であった。特に PA 演習、舞台芸術実習②音響、公演実習Ⅱ音響では Q10 が 4.00 であり、学生の満足度は高いと考えられる。卒業制作作品研究は Q10 が 3.40 であり、他科目に比べると低いが、Q8「教育到達目標を達成できた」は 3.70 であり、研究活動そのものの達成感は一定程度得られている。公演演習基礎Ⅱは Q10 が 3.85、Q6「わかりやすくするための工夫」が 3.93 であり、授業運営への評価は良好である。一方で、Q1、Q2 は全体平均をやや下回っており、シラバスや到達目標との関係を授業内でより明確に示す必要がある。自由記述では、PA 演習について、授業内容がわかりやすく多くの PA 知識を学べたとの肯定的意見があった。一方で、月曜 1 限であること、体力を使う授業であることへの負担感も示された。

2）要望への対応・改善方策

実習・演習系科目については、学生が実際に動き、機材を扱い、現場に近い形で学ぶことへの評価が高い。今後も体験的な授業を中心にしつつ、作業の目的、手順、安全上の注意点を授業冒頭でより明確に示す。PA 演習では、体力面の負担に配慮し、作業分担や休憩、重量物の扱いについて、より丁寧に指示する。卒業制作作品研究では、研究の進め方、到達目標、評価の観点を早い段階で共有し、学生が現在の進度と課題を把握できるようにする。公演実習・公演演習系科目では、シラバス上の目標と実際の作業内容を結びつけて説明し、単なる作業経験に終わらせず、舞台スタッフとしての判断力、協働力、実践力の育成につなげる。

3）今後の課題

高い満足度を維持しながら、授業のねらいと学生の実感をさらに一致させることが課題である。特に複数教員で担当する実習・演習科目では、授業ごとの目的、役割分担、評価の観点を教員間で共有し、学生にも簡潔に伝える必要がある。また、実習では達成感が得られやすい反面、体力的負担やスケジュール上の負担も生じるため、安全管理と学修効果の両立を図る。今後も、基礎知識、実践経験、振り返りを一体化させ、学生が自ら考えて行動できる授業運営をめざす。

以　上